

仏蘭西文学と僕

芥川龍之介

青空文庫

僕は中学五年生の時に、ドオデエの「サツフォ」という小説の英訳を読んだ。もちろんどんな読み方をしたか、当てになつたものではない。まあいかげんに辞書を引いては、頁ページをはぐつていっただけであるが、ともかくそれが僕にとっては、最初に親しんだフランス小説だった。「サツフォ」には感心したかどうか、確かなことは覚えていない。ただあの舞踏会から帰るところに、明け方のパリの光景を描いた、たつた五、六行の文章がある。それがうれしかったことだけは覚えている。

それからアナトオル・フランスの「タイス」という小説を読んだ。なんでもそのころ早わ稲田せだぶん文学の新年号に、安成貞雄やすなりさだお君が書いた紹介があつたものだから、それを読むとすぐに丸善へ行って買って来たという記憶がある。この本は大いに感服した。(今でもフランスの著作中、いちばんおもしろいのは何かと問われれば、すぐに僕は「タイス」と答える。その次に「女王レエンペドオク」をあげる。名高い「赤百合あかゆり」なぞという小説は、さらにうまいと思われない)もつとも議論のおもしろさなどは、所々しか通じなかつたらしい。しかし僕は「タイス」の行ぎょうの下へ、むやみに色鉛筆の筋を引いた。その本は今でも持っているが、当時筋を引いたところは、ニシアスの言葉がいちばん多い。ニシアスというのは警句ばか

り吐はいているアレクサンドリアの高等遊民である。——これも僕が中学の五年生の時分だった。

高等学校へはいったのちは、語学も少し眼め鼻はながついたから、時々仏蘭西フランスの小説も読んでみた。ただしその道の人が読むように、系統的に読んだのでもなんでもない。手当たりしだいどれでもござれに、ざっと眼を通したのである。その中でも覚えているのは、フロオベルに「聖サンアントワンの誘惑」という小説がある。あの本が何度とりかかって、とうとうしまいまで読めなかった。もつともロオタス・ライブラリイという紫色の英訳本で見ると、むちやくちやに省略してあるから、ぞうさなくしまいまで読んでしまう。当時の僕は「聖サンアントワンの誘惑」も、ちゃんと心得ているような顔をしていたが、実はあの紫色の本のごやつかいになつていたのである。近ごろケエベル先生の小品集を読んでみたら、先生もあれと「サランボオ」とは退屈な本だと言っている。僕は大きい僕にはおもしろいかもしれない。それからド・モオパスサンは、敬服してもきらいだった。（今でも二、三の作品は、やはり読むと不快な気がする）それからどういう因縁か、ゾラは大学へはいるまでに、一冊も長ちようへん篇へんを読まずにしまった。それからドオデエはその時代から、妙くめまさおに久米正雄と

似ている気がした。もつともその時分の久米正雄は、やつと一高の校友会雑誌に詩を出すくらいなことだったから、よほどドオデエのほうが偉く見えた。それからゴオテイエはもしかろがつて読んだ。なにしろ絢爛無双けんらんぶそうだから、長篇でも短篇でも愉快だった。しかし評判の「マドモアゼル・モオパン」も西洋人のいうほどありがたくはなかった。「アヴァタアル」とか「クレオパトラの一夜」とかいう短篇も、ジヨオジ・ムウアなぞがかたじけなくなるように、渾然こんぜん玉のごとしとは思われなかった。同じカンダウレス王の伝説からも、ヘツベルはあの恐るべき「ギイゲスの指輪」を造り出している。が、翻ってゴオテイエの短篇を見ると、主人公の王様でもなんでも、いつこう澆瀨たる趣がない。ただしこれはずつとのちに、ヘツベルの芝居を読んでいた時、その編輯者へんしゅうしゃの序文の中に、ことによるとゴオテイエの短篇が、ヘツベルにヒントを与えたのかも知れないという、もつともらしい説をあげていたから、またゴオテイエを引っぱり出してみて、その感を深くしたような次第である。それから、——もうめんどうくさくなくなった。

いったい僕が高等学校時代に、どれこれの本を読みましたと言ったところが、おもしろいことも何もあるはずはない。せいぜい人を煙まに捲くくらいが落ちである。ただせつかくしゃべったものだから、これだけのことはつけ加えておきたい。というのは当時あるいは

当時以後五、六年の間に、僕が読んだ仏蘭西の小説は、たいてい現代に遠くない。あるいは現代の作家が書いたものである。ざっとさかのぼってみたところが、シャトオブリアンとか、——ぎりぎり決着のと言つても、ルツソオとかヴォルテルとか、より古いところへは行つていない。(モリエールは例外である) もちろん文壇に篤学の士が多いから、中には *Cent nouvelles Nouvelles du roi Louis XI* までも読んでいるという大家があるかもしれない。しかしそういう例外を除くと、まず僕の読んだような小説が、文壇一般にも読まれているフランス 仏蘭西文学だと言つてもよい訳である。すると僕の読んだ小説のことを話するのは、広い文壇にも大いに関係があるのだから、ばかにして聞いたり何かしてはいけな——これでもまだもつたいがつかなければ、僕がそんな本しか読んでいないということは、文壇に影響を与えた仏蘭西文学は、だいたいそんな本のほかに出ないということになりはしないか。文壇はラブレエの影響も、ラシイヌやコルネイユの影響も受けていない。ただおもに十九世紀以後の作家たちの影響を受けている。その証拠には仏蘭西文学に最も私淑している諸先輩の小説にも、いわゆるレスプリ・ゴオロアのほうはく 磅 しているような作品は見えない。たとい十九世紀以後の作家たちの中に、ゴオル精神からほとぼした笑い声が時々響くことがあつても、文壇はそれにおし 唾の耳を借すよりほかはなかつたのである。この

点でも日本のパルナスは、おうがい 鷗外先生の小説通り、永久にまじめな葬列だった。——こんな理窟りくつも言えるかもしれない。だからこの僕の話も、いよいよばかにして聞いてはいけな
い。

(大正十年二月)

青空文庫情報

底本：「藪の中・将軍」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年5月30日改版初版発行

2009（平成21）年2月25日改版38版発行

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：岡山勝美

校正：坂本真一

2017年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

仏蘭西文学と僕

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>